

漱石『三四郎』美禰子の兄の思惑

Junko Higasa

里見恭助。それが美禰子の兄の名前である。

彼は、理学士である野々宮宗八と同学年の法学士で、早くに両親を亡くし、広田先生と大変仲の良かった兄を亡くし、今は二人きりの兄妹となった美禰子と一戸を構えている。野々宮さんは広田先生と親交がある。美禰子は広田先生に英語を習っており、野々宮さんと、その妹のよし子とも仲が良い。その野々宮さんは三四郎と同郷の人の従弟であり、東京での保護者的な役割を果たす。そして三四郎と同じ文科で交流のある与次郎は広田先生の家で書生として住んでいる。その与次郎の頼みで、三四郎は広田先生の引っ越しを手伝うことになり、そこで「池で見かけた女」美禰子との交流のきっかけができる。

恭助には家長の役割がある。まず美禰子を嫁がせてから、自分の結婚という段取りになる。そこでいろいろ思案する。

○野々宮は下宿を出て大久保に家を借りたが、妹のよし子が病後「学校の行き帰りに戸山の原を通るのが嫌で、兄の帰宅が遅く淋しい」と訴えた。そこで野々宮は美禰子に「よし子を食客いそうろうに置いてもらえないか」と頼む。美禰子は兄に相談なく、快諾する。

【恭助】美禰子はどうも野々宮君と結婚するらしい。それなら、よし子さんはいずれ義妹になる。いまは預かって野々宮君が早くまた一戸を構えるよう願うばかりだ。

○三四郎が与次郎に貸した金が戻ってこないで、下宿代が払えず困っていると、与次郎が「美禰子からお金を借りる」手配をしてきた。それは美禰子の持参金として用意された金で、貸すことは兄も承知しているとのことだった。

【恭助】おや、美禰子の相手は野々宮君ではないのか。小川君というのは文科の学生だというではないか。まあよろしい。このまま返さず結婚まで結びついても構わない。

○恭助の家には、野々宮の妹、よし子が同居している。そのよし子を恭助の友人が見初めて「よし子を貰いたい」と野々宮家に申し込んだ。

【恭助】よし子さんの縁談がまとまれば、美禰子は野々宮君と結婚できるのだろうか。いや、小川君と結婚するのだろうか。いずれにせよ、早く決まれば安心だ。

○よし子は恭助の友人との縁談を断った。

【恭助】自分もそろそろ結婚したい。しかしまだ美禰子の話がまとまらない。困ったな。友人に美禰子を貰わないか、打診してみよう。O.K.なら話を進めよう。

もう猶予はない。野々宮と三四郎との話がまとまらない美禰子は承諾した。(2020.7.1)